

長谷川太遺稿集『風の歌』 北の街社 昭和58年（1983） 8月刊

長谷川太遺稿集『風の歌』を読み

瀬川紀雄

昨年五月に街の北方新社から長谷川太詩集『私は風のようにであった』が刊行され、ご子息である編著者の長谷川淳氏より有難くもご惠贈に与った。詩誌「風」がまだ続いているのを知ってのご寄贈だった。

長谷川太は昭和三年（1928）に黒石に生まれ、二十歳前から詩を書き出し新聞に投稿しては度々入選し、藤田勇三郎発行の詩誌「樫」、以後種々の詩誌に寄稿していた。主に青森市の中学校の教師（音楽と国語）をされ、詩誌「風」創刊の年（昭和48年、1973）に四十四歳で亡くなられた「風」同人のお仲間の詩人だった。小生手元にないが詩誌「風」第21号は「長谷川太追悼号」だった。黒石市の東公園に詩碑があり、公園に花鳥の写真撮影に出向く時、時々拝んでいる詩碑である。昨今、「風」代表の櫻庭恵美子さんから、その「石」を建てる時の思い出を聞かせて頂いた。

近年発見された手書き原稿による『私は風のようにであった』を拝読し、短い詩も多いが二十代の約八年間に創作した約一五五編と実に多作であったこと、そのモダンな感性和斬新な表現、工藤正廣氏の従兄弟、喜多村拓氏の恩師であったことなどに驚く。

とにかく、恋愛詩、抒情詩から、詩に登場するリルケやヴァレリーの純粹詩志向、表現の巧みな凝縮とそれゆえの内容の深まりに感嘆する。当時における現代性に地方にいる者として驚く。ペンネームにちよつと「瀬川冬」を用いていたことに笑みを浮かべ。

なお、『私は風のようにであった』は二〇二一年度青森県詩人連盟特別賞となり、「青森の詩祭」での授賞式に長谷川淳氏が出席され、幾編か朗読した。中学校の元教師であり、青森市の合唱団で活躍の氏ゆえの、声量豊かな堂々とした朗読だった。

遺稿集『風の歌』を読みたくなり、それを所持していたことに気づいた次第である。

*

まずは先に「年譜」から抄として、もう少し詩人・長谷川太の略歴を述べておきたい。

昭和3年（1928）に黒石市に生まれ、八歳で母に死別。十四歳の時に青森師範学校予科に入学。翌年、青森大空襲で師範学校が焼失したため弘前市に移り、この頃から一戸謙三の詩の講義を受けては、合唱サークルの会誌に作品を発表し始める。

昭和23年（1948、十九歳）に師範学校を卒業し、黒石中学校の教諭となる。翌年から六年間ほど東奥日報文芸欄に応募し度々入選。黒石

の藤田勇三郎発行の詩誌「樫」22号、26号に発表。

昭和27年（1952）に師範学校同期で合唱サークルの仲間であった佐々木静と結婚。青森市立野脇中学校教諭となる。昭和31年に黒石の竹内二郎発行の詩誌「ばんせ」同人となる。翌年、石黒英一・蒔苗実・安岡一次らの詩誌「寓話」同人となる。昭和38年に藤田勇三郎らの詩誌「鰈」に発表。「鰈」は13号まで続いた。

昭和44年（1969）に筒井中学校に転勤。二年後、藤田ら七名による詩誌「いかるす」発行。浪打中学校に転勤。翌年、胃癌と宣告される。一年後に四十四歳で逝去。

遺稿集『風の歌』は、妻・長谷川静により昭和58年（1983）に刊行された。

昭和24年から、20年代、30年代、40年代という章分けで昭和47年までの詩62編、最後に「家族への詩」として17編の計89編が収められている。なお、メモの中に、標題付きの詩が9編と無題が11編あり、他に詩とみなしてよいのだろう断片が数多くある。メモでは走らせたような文字の判読など編集に年月を要し苦労されたようである。なお、先の『私は風のようにであった』とは重複する詩が多いが、手書き原稿では若干表現が異なることが多いことを長谷川淳氏が指摘されている。

巻頭にある「Sへ」の二編はとても美しく官能的な抒情を放っている。まさに真実の愛であろう。詩が歌うべき根本的なものであろう。

「裸身のお前を／今風が震えて過ぎ／白い空を 祈る様に ひとひらひとひら……」「蠢動する貴女への時間」とか「へもう お別れ……」／お前の吐息が／私のうちを／霧のようにひろがって／／ああ 私は何を言おう／私たちのはかない逢瀬について／私たちのはかないのちについて」。高貴な調べで、瞬間の愛の深さから人生まで見通している。読者は愛が結実するのを知っているから、安堵の思いで自らの体験を追憶しながら味わっていることであろう。最初の方は24年11月の「樫」25号に掲載されたものである。

続く「蝶の歌う」は死後作曲された交声曲「或る詩人のレクイエム」の第一曲となったが、愛の悦ばしき畏を、「初秋に」は平易な表現で部屋の窓辺を詩っている「秋のひざしのような かずかずの時間」や「朝顔が窓いっぱいをおおっているので 光りも空気も 緑色であった」「風は そこどかわいた音をたて このちいさな部屋は ふるえている一枚の枯葉のようであった」と、ともに情愛と詩情にあふれている。次の詩も「Sへ」である。

続く「山里にて」「谷間にて —— 日景にて」は、この地が目的であろう旅での山中である。県境近くの日景温泉だろうか。

ひぐらしを聞いていた

谷間の暗い窓辺で

音もなく 誰かが身を起こした

・
・
・
・
・

遠い幼年のように

いま 誰かが話しかける

とりのこされた風鈴にふれて

ぼくの中を

透明な季節の流れを

誰かが去って行く

ぼくは 知っている

すでに ぼくはとらえている

さわやかに立ち上がる 新しい風の掌を

ひぐらしの奏で、昼の谷間、杉木立の静けさ、ランプと旅情が重なる。二人の甘き蜜月であろうか。

続く詩では、「貝殻の歌」「墓場にて蝶を歌う」など基底に悲歌の調べが流れている。後者は、墓の間に張られた蜘蛛の巣にとらわれた翅ボロボロの蝶を哀れみ、実に優れた詩に思えてならない。傷だらけの

翅で「孤独な終焉をかすかな呼吸が震えて……」。最初の四連までと最後の六連。

指の間からかすかに透いた光線をなつかしみ

疲れた花びらの様に

小さなあどけない掌に

白っぽい足搔きを残して―蝶は

ひっそりと己れの非力を諦念していた

杳い 薄蒼い記憶の源から

なつかしい風景や

やさしい人々の間を

お前は流れて来た。

お前は眠って来た。

ひしめいて過ぎ去った暗色の流れのはて、

杉の葉ずれは空しい明るさに静謐し、

私の腕に―時計は

水底の様な この黄昏を指して止まっている

此処、緑も暗い季節の掌底に、

さあおな薄闇が訪れては、
なつかしい「ひぐらし」の歌もいろざめ―私は
むなしい夢を探るものの吐息を聴くばかり、

・
・
・
・
・

ぽつかりと開いた墓穴の
不思議な寂寥の側につつ立って、
私の―もう墓石だけの宇宙に―蝶よ。
それは、
あまりにも哀しいことでしかないのだ。

なお、『私は風のようにであった』では「蝶に」となっており、その三連まで上げると次のようになっていく。「様に」は「ように」とか、より柔らかな表現といえようか。

白っぽい足掻きを 掌にのこして
蝶は ひっそりと その非力を諦念していた
疲れて 花びらのように

お前は歌ってきた

なつかしい人々の間を
そのさびしい掌の間を
お前は流れてきた
遠い記憶の源から

それら ひしめいて過ぎ去った暗色の流れのはて
杉の葉ずれば 空しい明るさに静謐し
私の内に
時計は
水底のような黄昏を指して止まっている―今

客観的な観察による周囲を含めた見事な描写。それでいて、それらは過去への慕情や愛がまだ成就に至らぬことや、あるいは教職の何かに関する憂えも加わってかいるのだろうか。以後の三篇も基調は同じなのであろう、憂愁である。しかし「谷間にて」で、すがすがしが現れる。「ぼくは歌う／ぼくはおりてゆく／せまい夜と昼との谷間／そこに捧げられたぼくの空／無限につらなり―しかも／ぼくの心臓の形に切断された／視界」。この詩は東奥日報文芸欄に応募し入選。その後もすぐ沈鬱な心象になるが、必ずしも暗いとはいえない面もある。「風の悲歌」、二つ目の「冬の歌」、「夜」はいずれも入選作。

次のカタカナによる「結実」（昭和26年、1951）から解釈するに難

しい作風となる。

セロファンノ透明ヲ超シタ

白イ室

眸ノ哀願ニ立ツ

成熟ノ沈黙

古風ナビロードノ旗

蝶ヨ

次の「或る夕暮れの話」はヴァレリーの「パルク」を読んでの心象であり、入選作を含むいくつかの作品を経て「歌」ではリルケを引用している。この時期は純粹詩志向なのである。小生の高校三年時の担任で国語を教わった黒石市ご出身の相馬正一先生が深くかかわった「ぼんせ」や、中央のかの詩誌だろうか「地球」「地球通信」に掲載している。

以上は二十代前半の作品であり、その詩行の詩的センス、および内省を含む全体的なまとまりの良さに感嘆する。

30年代は再び分かりやすい詩行になり、「寓話」などに寄稿。植木曜介選で第二回県詩選、鎌田喜八選で第二回詩祭での入選作を含む。そして次男が生まれた33年から詩風に変化が生じ、子どもを歌うなど簡潔で平易な表現で明るくなる。そんな中、33年作の「ポプラの歌」は、

長谷川太詩碑がある黒石市の東公園にある日本一大きい二本のポプラだろうか。以下に全行。

五月のポプラは

いっぱいの風を孕んでゆれている

ざわめく白い葉裏をかえし

しなやかな枝々をよじる飛び立ちたい一瞬の願いを

ゆれている

いくとせのすこやかな成長が

広く大地に根ざし

風をいっぱい孕んで天にひらいた願いの大きさだけ

深く暗い土にとらわれ

とらわれの根ががっしり土にすえることによって

腕いっぱいの願いを

五月のポプラは静かにゆれている

ポプラに詩人夫妻、かつ、お二人のご子息を重ねてしまう。その後の作は紹介されておらず、子育てや職務など多忙で寡作だったのだろうか。育児が何よりも楽しかったのだろうか。37年の作は極めて日常

的な題材で、とても平易な表現となっている。

40年代の詩は「鰈」などに寄稿し、再び愁いを少し帯びてやや難しい表現になっている。以下に「日が照り」全行。

日が照り

空は見事に晴れ上がっているのに

表面にくつきり残雪の山脈を映しながら

結局充ちることのない虚しさを

茫々と風が鳴っている

私はカラッポのガラス瓶のようだ

僅かばかりの内側の汚れを自分の形として

泥の中に立っている

次の「風景」の最初の二行は次のようになっている。

すべてが灰色じみてみえる地球の顔をさらって

風だけが生きもののように入りまわる真昼

以後の詩も、当初の詩群から通奏している「さびしさ」という語が

時々現れる。二度出てくるのは「砂ぼこり」で、以下にその全行。

目標を設定する

どうでもよい手ばかりが浮びあがるので

慎重な手続きが石になる

その石塀の内側は明るい砂の拡がり

草も生えない真昼をうがって

角のとれた石の流れが

すでに過去となった川のありかを証明する

さびしさは放たれた鳥となって

その捨てられた鳥籠がわたしだ

買って来た年輪のうえ

鳥の形をしたむなしさが目となる

疾走する風のあとから

悲鳴のように立ちあがる砂ぼこりを見る

強烈な内省である。目標、方法、石のような固定さ、生の過去の石化、その淋しさあるいは寂しさが鳥化、空になった鳥籠など解釈に難しい行も多いが、多義的に解釈し、その多様さが一行一行の意味も深め、また全体的な内容をも深める。かつ、詩的效果をねらったひらがな使用を避け、平常に漢字を用いているのが好効果だろうか。それだ

けに、ひらがなの「むなしさ」の淡い儚さ、もつと無に近い原初の純粋な空間をも覚えてしまう。

職業に恵まれ人が羨むような家庭に違いないだろうに、このさびしさは、好きなものの授業、合唱とブラバン指導、生徒指導などで家族一緒の時間の少なさへの嘆きを含んだものだろうか。時間不足など、自らの創作上のものだろうか。あるいはもつと人間存在の宿命としてある、詩人ならではの自覚する普遍的なさびしさなのだろうか。すこぶる内容の深い作品に思われる。

それだけに「いかるす」などに発表した「紀行」に救われる。恐山へのようである。連れ合いと、あるいは家族旅行だろうか。

ああ、46年8月の「無題」。胃の具合が悪いのを告げている。何処なのか不明な「紀行Ⅱ」も暗い。「そらのよくはれたタベ」など心温まる多くの詩編を含む^{うた}家族への詩に救われるものの、それだけに詩人の病の兆しが痛ましい。

とにかく様々な「風」が頻出する。それは常に詩人の中に入り込み、詩人の吐息ともなる。それゆえに詩集標題に「風の歌」が相応しいのは勿論、詩人自身が風の歌そのものに覚えてしまう。そして、詩作しながらも、どこか満たされない寂しさも覚える。それは他者からの評価・賞讃の有無とかからではなく、詩作に伴う純粋な苦悩のようなものに思われる。だから、詩になりうるのだろうか。そういう詩精神を論

らされる。それは以下の「病床にて」に繋がるようにも思われる。

死 ということでもつとも つらいのは

自分の中の 自分である

この ことばにならない 表現を得ない

雑多な「怨喜夢悲」といったものが

その形を得ないで この世から

なくなってしまうことだ……

ひとの存在というものは

そのような とぐろを巻いたもやのようなもの

その人そのものであるドロドロしたもの

形にならない熱気のようなものの存在

なのだ へ48年2月5日

因みに、一戸謙三に関しては、34年の「寓話」2号に掲載された「同人の遍歴」で触れている。以下に、その抄。

「りら、そさえて」という会がありました。H公園の北側の濠の佇り。ガランとした公会堂の一室で“低い空は、ぼんやり街の灯をうつして……”と福士幸次郎の詩を読むI先生のものさびた声に、いのちの新しい歓びと愁いをみる思いでした。

ひよろながい体は、短い学生マントを着ているので、殊更に孤独な様子でした。はてしない愁いのなかにこもって、このはいつくばった街を歩いて行くひと。公園の西門通り。銀杏の葉がしきりに散っていました。

(略)

I先生から毎月数通の便りがありました。「青森へ出かけたいと思つても、日曜には木造へかえるためだめ。そして私はたいいてい寝てばかりいるのです。私は生きることによって疲れてきました(S.S.S.付)」
なお、音楽については詩の中でサティが登場し、次の断片はマラー
―であるうか。

みどりにそまって

すっかりあおざめ

その風に吹かれて

すっかり軽くなって

移ろう日かげのように

あ

きみよ

いつてしまった　ひとときの

もう気配だけになってしまったうたよ

やっぱり「大地の歌」を買いおう

〈47年4月6日〉

小生、高三の時にFM放送で現代音楽に驚き、次いでマラーの「大地の歌」で完全にクラシックのファンになり、社会人になって早々に購入したのがサティのピアノ曲全集だった。楽譜の読めない音楽ファンは、詩人音楽家・長谷川太に励まされた思いである。
メモにあるが、詩論については谷川雁の方法に賛同し、詩は山村暮鳥の「雲」を特に好んでいたようである。

最後に「あとがきふうなもの」(長谷川静)から、

「若い時から、風の中で、風のように生きてきた人」という。

2022.8.10

瀬川紀雄HP 〈シエカの風〉「読書」内